

東京市本郷区千駄木町二一〇
事務所 農村運動同盟
電話東京六二四一、二番

発行編輯 望月 桂
印刷所 望月 桂
東京市本郷区中町五五七五
發行所 小作人發行所



文

一 第五卷、第三十號
一九二六年

(東京市本郷区千駄木町二一〇)

本誌の趣旨は、農民の生活の改善、土地の改良に在り、
農民の生活の改善、土地の改良に在り、

我等の貧乏の救はる、時

○負つた兒に淺瀬を教はる○

貴族よ、富豪よ、資本家よ!!
そして、其走狗たる政治家、軍人、
學者、文人の徒よ!!

我等は噴火上に舞踏し、塵埃
を張り、乃至は意圖を食つて居る
のだ。我等の吠えづらをかぐ日は
もうすぐだ、速くないぞ!!

これは、誰れかしの言つた言
葉だ。

二

曾てフランス大革命の初めにあ
たり、怒り狂ふた農民は、千二千
と群をなして是地、彼地に蜂起し
て、領主や地主のやかたを襲ひ、
彼等が大切にしまひ込んである土
地を帳を焼き捨てさせ、或は土地
に關する権利を抛棄するとの證書
に署名をさせた。そして農民は、
これ等の土地を開墾したり、耕作
したりした。

この時の農民の熱心と精勵とを
驚嘆した歴史家は「開墾以來未だ
曾てない程の熱心と精勵とを以つ
て開墾し、耕作した」と言つて居
る。

斯の如くして、フランス農民は
富んだ。そして、四境に迫りつゝ
あつた聯合諸國の侵入軍をも撃退
して予ひ、轉て、ナポレオンのや
うな馬鹿者に依りて空前の暴勢が
行はれたことにも、耐えるやうに
なつた。

革命以前に於けるフランス民の
生活は、實に苦境に絶したありき

まで、住民の三分の一は年々饑饉
に襲はれ、全國に放浪する乞食の
数は百五十万人を超えたと言ふこ
とだ。そして國民の大多数は農民
であつたのだから、その難澁した
もの、農民であつたことは勿論の
ことだ。この農民達は考へた。

「かう我々が饑饉に襲はれて
苦しむのは、耕作する土地が足
りないからだ。耕作する土地があ
りさへすれば、何にもこんな困
ることはない。さうだ、土地だ、
我々は耕作地があるのだ、——と。
しかも彼等は、眼の前に遊ばせて
ゐる、領主や、寺院や、大地主共
の廣大な遊園地や、狩獵地や、邸
宅地を見たのだ。

「あの土地を耕作すれば——
さうだ、さうだ。
と、彼等は間はす語らずに一致
した。そして、やがてそれが一揆
となつたのだ。かくて彼等は自ら
要する土地を獲得し、それを開墾
し、耕作し、且つ自らそれを防禦
して救はれたのだ。

三

我等は實に貧乏だ。その貧乏な
る點に於ては取てフランス大革命
以前の農民にゆづらない。
世のもの知り共は「それはお前
達が智識がないからだ。怠け者だ
からだにせよ、色々な原因を數
へ立てる。ヘン、笑はせやがらア!
産米検査だの、儀仗の検査だの、
何んのかの我々を困らせやがら

で、しかも自分等は手白足白で遊
んで居やがつて、我々の働きが足
りないなどと勝手な事を吐きやが
る。
我々は、貧乏や轉興で百姓をす
るんぢやないんだ。生き度いから
なのだ。せめて年寄や小供だけな
りと、暖いさつぱりした物を着せ、
たまには甘いものも食べさせたい
と思ふからだ。我々が好む酒や
酒や煙草位は飲みも吸いもした
いのだ。その酒だつて、煙草だつ
て、まるで税金を呑んだり吸つた
りする様なものぢやないか。道物
だつて、魚だつて、みんな商人共
の手垢になつて了ふんぢやない
か。

なのだ。
五
おふつた兒に淺瀬を教はるとい
ふ事がある。兒供等、二三人で野
山に遊びに出掛け、其中の一人が
イサゴでも見付けて見る。やい八
もこい、熊も来いと、イサゴが澤
山見付けたことを皆んなに呼び知
らすだらう。そしてみんなで其の
教養を促し合ひ、與あまれば家に
居る妹や弟にも持つて歸つてやる
だらう。これが人間の自然だ。

今頃の奴等、幾に金持共のする
處を見ろ。彼等が若しイサゴを
見つけたなら、奴等は直ちに其處へ
繩張りをしてやがつて、自分等が
入らぬに之れは已れの所有
だとなすのだ。それは奴等が
見つけたであらう、けれども奴等の
作つたものではない、自然の賜物
だ。それを自分の所有だと言つて
子々孫々に傳へやがる。しかもそ
の子々孫々がいるものならば又何
は言はねえが、いらぬのだ。そ
のいりもしないものを所有物だ
といつて、いる人々の口をぬち上
げやがるのが、今の金持共だ。

四
前にも言つた如く、フランスの農
民は耕作地が足りないと言ふので
奮起した。では、我々にもやはり
土地が足りないだらうか?
いや、さうぢやない。集約農法
とかによれば、今の土地だけでも
廣過ぎる位なのだ。
それでは、牧場高が足りないの
だらうか?
それだつて、そんなに不足ぢや
ないのだ。我々が一生懸命で居
なければならぬのは、第一に農
高の年貢を取られるからだ。その
上に、賣るには安く、買ふには高
く買はされるからだ。取るものは
なくて、取られるものばかりだか
らだ。

六
我々が耕作して居る土地だつて
そんなものだ。地主共が作つた
ものではない、自然のものだ。自
分が耕作するとか使用するとかな
らば見もなるが、耕作すること
も出来なければ、使用もしないで
居るのだ。それで我々が年貢をま
けて呉れと云へば、地面を明け渡
せなどいやがる。

これぢや、何んなに暖いだつて
貧乏せずに居られないのだ。この
道徳は、一尺の足と一寸の口

今に見ろ、奴等の吠えづらする
時が来るから!!